痛みしらずのブラックスワン～やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。より～

伊勢村誠三

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

嘘告白の一件からすっかり孤立した比企谷八幡。

そんな彼のもとに修学旅行あけから転校してきた『ナランチャ・ギルガ』を名乗る少年が接近しこう告げる。

「君は、父親について知ってるかい？」

八幡が生まれた頃よりずっと秘密にしてきた『悪霊』をもつナランチャの出現を皮切りに八幡は奇妙な冒険に巻き込まれていく！

目　次

猛独が襲う ―― 1
逆位置『世界 ―The World―』 ―― 6
拝啓ドッペルゲンガー ―― 12
ブラックスワン ―― 18
Billie Jean ―― 25
ダイヤモンドの純度 ―― 33
死刑台のエレベーター ―― 38
その拳を叩きこむ ―― 46

猛独が襲う

1

イタリアがネアポリス。
かつて地中海との貿易で栄えたパスタの故郷として有名なこの街に、一人の少年が歩いていた。
金髪に紫目、デザイン的に穴の開いた緑色のスーツを着た鋭い目の少年だ。
イタリア事情をよく知る者が彼を見れば１０人中１０人、彼をギャングと判断するだろう。
そんな彼は暫く目的地など無いようにふらふらと歩いていたが、やがて一つのリストランテに入る。
「いらっしゃいませ。」
「彼と待ち合わせしてる。」
そう言われるとウエイターは一瞬目を細めたが、すぐに一番奥の席に案内した。
もう既にボルサリーノ帽をかぶった伊達男が待っていた。
「お久しぶりですムーロロ。」
「ああ。ま、座れ。」
促されて少年が座ると、ウエイターは彼に牛肉のボロネーゼが出される。
その皿の下には一通の封筒が敷かれている。
「明日1時、ネアポリス・カポディキーノ国際空港の組織所有のジェット機だ。
すぐに日本に行ってもらう。
封筒の中身はパスポートとチケット、日本での活動拠点の鍵。
そして指令所だ。指令所の方は飛行機の中まで開けるな。」
「了解です。」
短く伝えるとムーロロと呼ばれた男はウエイターに金を渡して去って行く。
残された少年はボロネーゼを食べ終えると封筒をもって店を後に

した。

2

「……来たのね。」

「ああ、まあな」

総武高校奉仕部は、きわめて悪い空気が流れていた。

一見、何時も通りの依頼の無い日の様に見える。

だがただでさえ離れたところに座っている部長の雪ノ下雪乃と、問題の一番の中心人物、比企谷八幡の心の距離まで離れているのだ。

（どうしたらいいんだろう…）

部員の由比ヶ浜結衣はそんな二人を、びくびくしながら見てるしか出来なかった。

どうにか、どうにかこの空気を払拭したい。

そう思って何か二人に声をかけようとした時だった。

コンコンコン、と、きっかり三回。

ドアがノックされる。

全員気を張っていたからか、すぐには反応できず、再びドアがノックされる。

「どうぞ。」

雪乃がそう言うと、ドアを開けて一人の男子生徒が入って来た。

天然の金髪に、紫目。見るからに白人で、背丈は１７５ｃｍぐらい。

制服は当然ながら総武高校の男性用の物なのだが…いったいどんな改造をしているのかデザイン的にクレーターの様に部分部分がへこんでいる。

ネクタイも私物らしく黒に紫のいちごの模様がついたものだ。

「失礼する。奉仕部はここであっているかい？」

「ええ。それで、ご用件は何かしら？ナランチャ・ギルガ君。」

その名前は結衣も知っていた。

イタリアのナポリから仕事の都合でＪ組に編入して来た転校生で、編入テストは全教科満点だったという噂はかなり有名だ。

「ああ。僕はこの学校に来て日が浅いだろう？

どうしてもある要件を伝えたい人がいるんだが、
生憎彼がどんな音楽が好きかも知らなくてね。
君たちに顔つなぎをお願いしたいんだ。」
「なるほどね。いいでしょう。それで、その人の名前は？」
「ヒキガヤハチマン。」
そう言った時、ナランチャの背後でビクッ！と八幡が震えた。
雪乃と結衣もそちらを剥く。
「もしかして君が？」
「ひ、人違いでしゅ…」
そう言って滅茶苦茶動揺しながらそっぽを向いた。
「嘘は、よくないな。」
そう言ってナランチャが目を細めたその時、八幡の体が大きくはねた。
そしてまるで腹部を強く蹴られたかのようにうずくまり椅子から倒れ落ちる。
「!?　比企谷く…なぜ止めるの由比ヶ浜さん？」
駆け寄ろうとした雪乃を結衣が裾を掴んで止めた。
「ゆきのん、見えないの？
あれ、なんか…ギルガ君の中から、変な、影か、モヤみたいなのが…」
「モヤ？」
「見えるのかい？僕の『パープル・ヘイズ・ディストーション』が。
もっとも、今うずくまってる彼はもっとはっきり見えているだろうが。」
ナランチャがそう言うと、八幡はその腐った眼を細め、歯を食いしばった。
ズバリ言当てられた通りなのだ。
彼の、八幡の目にははっきりと、白と紫の肌に、バイザー付きの黒いヘルムを被った血走った目に縫われた口からダラダラとよだれを垂らす怪人が、はっきりと見えているのだ。
「さあ、正直に答えてもらおうか。

君は、ヒキガヤハチマンだね？」
「くっそぉおお！」
八幡はそう叫ぶと、二度と見たくなかった［［ｒｂ・自身の怪人　＞・・・・・］］を繰り出す。
薄く肉の付いた黒い骸骨に鎧のようにも見える鉄板を打ち付けたそいつは頭をすっぽり覆う白いペストマスクをかぶった怪人だ。
「え!?ヒッキーも!?」
「あなた達さっきから何を…」
目の前のナランチャの怪人に向かって飛び出す。
『ＵＲＥＥＹＹ!!』
「喋った!?」
結衣の驚きの声を聞きながらペストマスクはラッシュを繰り出す。
「温い！パワーも、スピードも、
その気になればムーディーブルースでもさばけるな！」
『うばっしゃあああああああ！』
ペストマスクをパープル・ヘイズ・ディストーションは簡単に返り討ちにしてしまった。
ペストマスクが拳を受けるたびに八幡にも殴られた後のような傷ができ、壁に叩きつけられ、ついに動けなくなる。
『ギャ、ギャレ……』
ぴく、ぴく、と震えるペストマスクの手首をパープル・ヘイズ・ディストーションは容赦なく踏みつける。
八幡はペストマスクと同じ手首を押さえて声にならないうめき声をあげる。
「仮にも彼の兄弟なんだし、もう少しやるかと思ったけど、
案外、大したことない人間なんだな。君は。」
「いきなり来て…なんなんだよ。」
「僕は君を調べに来た。あるお方の命令でね。
果たして君のスタンドが脅威になるか。
けど、取るに足らない。
その彼女の言うところの影かモヤも強さは使用者の精神力に依存

する。
君のスタンドからはそれが感じられない。」
「だ、まれ…こいつが、こいつが強かったらあの時あんなもんじゃ！」
「ほう！なるほど！
つまり君は自分のスタンドに特大のブレーキをかけたわけだ！
まるで臭い物に蓋をする用に！
そこら辺にいるカラスかと思えば、
その実自分を自分で決めつける黒い白鳥（ブラックスワン）って、ところか。」
そう言って鼻を鳴らすとナランチャは部屋を出ていった。

逆位置『世界　―Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ―』

１

比企谷八幡がスタンド能力を得た理由。
それは、彼がＤＩＯの息子であるからに他ならない。
彼の母は新婚旅行でエジプトに行った時、
あのＤＩＯに屈服し、彼の子を孕んだのだ。
そしてＤＩＯが空条承太郎に倒されると、
彼女は夫とともに日本に帰り、彼を出産。
幸いにして肩の星型の痣以外、
全くと言って良いほど父の面影の無い彼に両親は安堵した。
しかし、彼が継いでしまった父の要素は両親の全く感知できぬところで発現していた。
スタンド能力。
つい昨日、ナランチャ・ギルガこと、
パンナコッタ・フーゴに『ブラックスワン』と名付けられた彼の分身である。
「友達じゃ、駄目かな？」
中学生の時、比企谷八幡は同じクラスの折本かおりに告白して振られた。
これだけならまだ甘酸っぱい青春の一頁で済ませられることだろう。
「あいつ、折本に告って振られたんだってさｗｗ」
「だっさｗｗｗｗつかなんでいきなり告白??」
「気持ち悪いよねー。
いつも一人で何考えてるか分かんないし。」
最低限の擁護をしておくと、
折本かおり本人は、悪意御あってこの話を広めたわけではない。
なんてことない日常会話の様に彼を振ったことを友人に話しただけだった。
だが彼女の周囲は悪意を持って彼の行動をまるで悪事のように広

めた。
人付き合いが苦手で、あまり人と繋がりを持っていなかった彼は、人間の醜悪さに絶望することになった。
最初はクスクスと、背後で笑われる程度だったが、物がなくなったり、階段で転ばされるようになったりと、いじめ行為はエスカレートしていった。
そしてたまりにたまった彼の鬱憤は、修学旅行のある一軒で爆発した。
二日目のキャンプファイヤーで彼は組んでくれる相手がいなかった。
それくらいならもう彼も何も感じなかったが、
ふと目に入ったのだ。折本かおりと、その相手の男子生徒が。
その男子生徒は八幡の死線に気づくと、
勝ち誇ったような笑みを隠そうともせず八幡に向けた。
「………。」
八幡は音楽に合わせて踊る人々を無理やり払いのけて最短距離でその男子生徒に詰め寄る。
「お前なんか！」
そう叫んだその時だった。
彼の背後から明確に像をもってスタンドが現れたのは。
『UREEEYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!!』
まず彼はいきなり左足を押さえ泣きながら痛い痛い！と悲鳴を上げて倒れた。
そんな彼に異常を感じて駆け寄るクラスメイト達。
しかし、八幡の視界に捕らえられたすべての人間は体のけがなどしてない部分を押さえて苦しみだすか、急に青い顔をして泣き叫び出すなどの異常をきたし、そうならなかった物も見えないし触れることの出来ないスタンドビジョンにことごとく痛めつけられた。
「はっ!……え、、あぁ？」
我に返った時、その場に立っていたのは八幡だけだった。

周囲を見渡す。
皆、幻痛やトラウマの強制想起で倒れているか、
ブラックスワンにタコ殴りにされたかの二択だった。
「お、れ…が？俺が、やったのか？
あああ…ああああああああああああ!!!!!」
この一件は全員何らかの精神的、
又は物理的な強い痛みを伴う出来事を思い出した集団ヒステリーとして処理された。
八幡は両親に許可を取り転校。
ただ一人すべてを最後まで目撃した折本かおりは、不登校のひきこもりになってしまった。
それ以来、八幡は二次元や自分の殻の内側に逃げた。
（こいつに名前なんてない。
だっていないし誰にも見えないんだ。
俺にしか見えないってことは居ない！
だから無視しろ。無視するんだ！）
彼はスタンドを縛った。
自分の内側に見たバックリわれた地割れの底のような闇に眼をそむけた。
結果、それ以降スタンドが出てくることさえなかったが、
八幡は益々内向的で偏屈なひとりぼっちになっていった。
しかしそこに、フーゴが、逃れ得ない自分以外のスタンド使いが現れた。
スタンド使いとスタンド使いはひかれあう。
彼がずっと目を背けて来た裏側が自分の方からやって来たのだ。

2

「やあ！そこの彼女！」
白と緑のセーラー服の少女がアホ毛をぴょこん、と、揺らしながら振り返る。
ナランチャことフーゴは次なる任務を遂行しようとしていた。

八幡の妹、比企谷小町との接触である。
「時間を知りたいんだ。
時計を見せてもらえるかな？」
「いいですけど…」
フーゴに対してやや不審げな視線を向ける小町は外した時計を見せた。
「『パープル・ヘイズ』。」
『パープル・ヘイズ・ディストーション』すかさずその腕を掴み、
逃げないようにつま先を踏みつける。
「い、いや」
叫ぼうとした口も反対の腕でふさぐ。
「悪いが、君を調べるためなんでね。」
そう言われた小町は一瞬、泣きそうな目を丸くしたが、すぐにキッ！と強く睨む。
彼女に白い翼が生え、その翼が伸びると同時に流体型の白い怪人が現れた。
顔は小さく女性的で、背も低い。
両腕はあまりパワーがないのだろう、兄のブラックスワンより細い。
だがそのスピードはかなり速い。
繰り出された手刀をのけぞって避ける。
パープル・ヘイズ・ディストーションのバイザーをかすめると、
フーゴの額にも小さな傷が出来た。
「あ、あなた…いったい……」
「どうやら君は、あの兄よりは使いこなしてるようだね。」
「!?　お兄ちゃんに何を！」
「痛めつけた。」
その言葉に小町は益々フーゴを睨むと、
スタンドと共に走り出す。
「『ドリーム・バイ・エンジェル』ッ！」
スピードだけならスティッキーフィンガーズとタメも張れるだろ

う。
だが、パワーは甘く見積もってD。
パープル・ヘイズなら強引に突破可能だ。
だが、
（何か能力を仕掛けてくる…
だが僕は自分の脳ウ力で反撃するわけにはいかない。
なら！）
あえて急所以外をフーゴは防御しなかった。
接近され無数の刺突を正面から受ける。
「え!?嘘!?」
「そこ！」
一瞬完全に驚いて止まった小町にフーゴは容赦なく膝蹴りを叩きこんだ。
「ご！」
「悪いが、報復しようなんて思わないくらいに敗北してもらう！」
『うばっしゃあああああああ！』
肩、足、脇、連続蹴りをスタンドに叩きこみ、小町を後方にふっとばす。
羽が散り、小町は仰向けに倒れ、背中を思いきり地面に打ち付ける。
しかしフーゴは見逃さなかった。
小町が気を失う寸前、笑ったのを。
すぐにのかった羽に何かあると判断したフーゴはパープル・ヘイズの拳についた辛子色のカプセルを飛ばした。
一番近くにあった羽に触れて砕けたカプセルから、
目に見えない最凶の攻撃が放たれる。
殺人ウイルスの散布。
それが『パープル・ヘイズ・ディストーション』の固有能力だ。
外に飛び出しウイルスは光で簡単に殺菌されるが、
増殖力は強力で、一瞬あれば人体を残らず食い荒らせる。
たった一枚の羽根を食い尽くすなど造作もない事だった。
（さて、残った羽から離れよう。）

落ち着いて離れたフーゴ。
そこに風が吹き、残った羽が反対の歩道の方に飛んで行く。
「あれは…まずい！ユイガハマ！」
不意に声をかけられた結衣は、彼女からは靄の様に見えるそれに驚いて立ち止まるが、
なにかスタンド由来の物と判断し、すぐに両手を交差させて頭を守る。
すると彼女の、影にノイズのような物が走り、地面から浮き上がるとその羽を掴んで明後日の方向に投げる。
羽は一瞬赤く光ると爆発した。
「今のは…」
『ふふふふっ……』
影は不気味に笑うとまた地面に張り付いた。

拝啓ドッペルゲンガー

1

小町、結衣と接触した翌日。
ナランチャ・ギルガことフーゴは普通に学校に来ていた。
別に隠れる理由も何もないからであり、
尚且つ由比ヶ浜結衣のスタンドが気がかりだったからだ。
(ユイガハマはかつてのナランチャの様に『ポルポの試験』を受ける前からスタンドをぼんやりだが視認で来た。
前にスピードワゴン財団に教えてもらった突発的隔世遺伝による生まれつきのスタンド使いの成り損ないだと思っていたが…)
彼女を守った影のスタンドは明確に自我があった。
その姿は正しく砂嵐などのノイズの走る影で、
本体の反応から推測するに無自覚に発現していたのだろう。
(多分タイプは一体化型。
物や髪の毛みたいな体の一部は聞いたことあったが、
影みたいなものにも憑けるとは…)
そう考えながら歩いているとふいに呼び止められた。
「ギルガ!ちょっといいか?」
「ヒラツカ先生。どうしました?」
「昨日比企谷と会って話してどうだった?」
そう言って平塚は真っ直ぐにフーゴの目を見た。
今まであったことのないタイプの教師なだけに、
フーゴは少し彼女を不思議に思っていた。
(なんでこいつは態々奉仕部に依頼するように言ったんだ?
いや、彼はそこの部員だったから当然放課後に話をしようと思ったらあそこに行っただろうが、
担任のこいつが取り次いでくれた方が早かったのに…。)
何か下心があろうが別にどうでもよかったし、
早く話を終わらせたかったのでフーゴは正直に答えた。
「個人的に好きになれませんね。

前評判程下衆な人間ではないですが、
物事に対する姿勢が気に食わない。
ちょっとばっかし昔の自分に似てる気がするせいだと思います。」
「ほう?意外だな。その心は?」
「詳しくは言いませんけど、
あいつはごちゃごちゃ考えて行動する末に『正しいバカ』になってるんです。
僕は考えて行動した結果逆でしたけど。」
「その時、そこで、『正しいバカ』にならなかったのか?」
「ええ。だから僕は、今、ここにいます。」
それがひどく気に入らない。
『正しいバカ』になることは茨の道を往くことを意味する。
傷つかないなんてありえない。
それはフーゴも分かっているが、
彼はその傷が自分にしか出来ないと本気で思ってるのが質が悪い。
「僕はヒキガヤハチマンが嫌いです。
奴は他人の痛みを知ろうとしない、正しいバカです。
日和見で上辺だけ取り繕って問題起きたら誰かに丸投げにするような奴よりかはマシでしょうけど、あいつは周りを見ようとしない。宙ぶらりんな奴です。」
その評価を平塚は黙って聞いていた。
そして、そうか。と一言言って平塚は後ろを指さす。
ふり返ると、いつの間にか比企谷八幡がいた。
彼は今にも唸りそうな顔で、フーゴを睨んでいた。
「なんだよ。言いたい事があるなら言ったらどうだ?」
「……別に。」
そう言ってそっぽを向いてそそくさと去って行った八幡にフーゴは舌打ちをした。
「タマなしが…」
そしてそう毒づくと教室に向かう。
「まて、ギルガ。これは次いでなんだが、

今日由比ヶ浜が欠席するらしい。何か聞いてないか？」
「いえ、何も。」
フーゴは平然と嘘を吐いた。

2

カンノーロ・ムーロロは不機嫌だった。
放課後、学校が終わってからすぐ来るはずだったフーゴが遅刻したことも、比企谷小町を連れてきたことも。
勿論彼女にもスタンドがあると分かった以上ほっとけないし、学校で待ち伏せされたら出会ってしまうのも仕方ないのも分かるのだが、それでも彼は不機嫌になった。
「ふん。まあいい。俺の度量に感謝しろよ。ついで。」
「ついでって…」
「あくまで俺らが本来与えられた任務は
『ヒキガヤハチマンの調査と、その結果に応じた対応。』
お前のような色気なんて全くないチンチクリンのガキなど本来どうでもいいはずだったんだよ。
それをわざわざこんな回り道させるんだ。
ついで意外になんて言ったらいい？」
小町はむっとしたが、ここで言い争いをしても仕方ないと判断し、
「とにかく、これは何なんですか？
ずっと私にだけ見える幽霊みたいなものだと思ってましたけど、違うんですよね？」
ドリーム・バイ・エンジェルを出しながらそう問う小町。
ムーロロはめんどくさそうに鼻を鳴らすと顎でフーゴに説明を促した。
「これは幽波紋（スタンド）と言って精神エネルギーの具現化。
守護霊と言うより分身に近い。
主の精神性を反映した姿や能力をもつ。
僕のは昨日見せたが、ムーロロのは驚くぞ？」
「なんでこんなガキに…」

「まあまあ。ウォッチタワーの『凄味』を見せれば生意気な態度もきっと変わりますよ?」
フーゴがそう言うと何やら借りがどうとかぶつぶつ言った後ムーロロはポケットからむき出しのトランプデッキを取り出し、一流マジシャンも顔負けの手さばきでシャッフルすると、手早くトランプタワーを造った。
「だーんだんだらだんだらだんだら…だん!」
ぱちぱちと、フーゴが拍手すると、ニョキニョキととカードの一枚一枚から手足が生えて動き出す。
『『ボ・ボ・僕らは『劇団見張り塔』ォオオオーーーーー!』』
「こ、これもスタンド!?トランプが、動いてる…劇してる…。」
てっぺんからパラパラと降り立ってくるトランプたちは見御棚ダンスと連帯で座長のジョーカーからそれぞれのマークを紹介し、いよいよ本編が始まる。
『この度お教えしますは今話題の総武高校奉仕部!
メンバーは三人!これがどうにも面倒ぞろいのアホンダラ!』
『ユキノシタ♪』
『ヒキガヤ♪』
『ユイガハマ♪』
『おーい俺が余る!』
四枚のスート4が踊りながらおどける。
そして変わってスート5が前に出る。
『どいつもこいつも自分で自分の首絞める!』
『だーからスタンドも三人そろって一癖二癖キリがねえ!』
「なんだと!?」
「それ本当ですか!?」
「ああ。この俺の『ウォッチタワー』が告げるのは〝真実〟だ。」
ムーロロが黙って続きを見るように促す。
『これが如何にもミイラ取りがミイラ取りで…』
『おい♠の5!そこは医者の不養生だったろ!』
『黙ってろ♣の6!不吉な数字の癖に意見するな!』

『なんだと格下の分際で！』
『まーまー落ち着けよお客が待ってるぞ！』
『『黙ってろ！』』
……喧嘩が始まった。
殴り合いや自分についた数字の投げ合いの末に一枚、また一枚と倒れていく。
「なにこれ…」
「大丈夫。真実だけは告げてくれるから。」
最期に残った♠のAがふらふらと立ち上がり
『ユイガハマの「ディアー・ドッペルゲンガー」…あれは、本体を殺しうる…』
そう言って倒れ伏した。
「ッ!!!!結衣さん！」
「な！おい待て！相手はユイガハマのスタンドだぞ！
お前の爆発する羽と僕の能力！どちらも破壊特化型！
言ったところで彼女を傷付ける以外何もできない！
彼女のスタンドの手助けをするようなもんだぞ！」
そう呼び止めるが小町はもう出てしまっていた。
ムーロロの方を振り返ると、彼はフーゴを見返すだけだ。
どうやら手は貸してくれないらしい。
フーゴはため息を吐いて彼女を追いかけた。

3

『もうさ、いいじゃん。いなくなっちゃえば。』
耳をふさいでも水の中に頭をいれても、それの声は否応なしに結衣の耳に響いた。
古いテレビの様に砂嵐の走る自分自身影が、物置のドアに背を預け頭を抱え体育座りしているはずの結衣の首に手を回し、延々喋り続ける。
『だって今日誰もお見舞いに来ないし、
誰からも電話なんて来ないじゃない。

だから、さ。死んじゃおうよ！さくっ！とさ！
包丁！縄！浴槽！どこでもいいから死んじゃおうよ！』
自分と全く同じその声は極めて明るく残忍に、
まるで虫をちぎって喜ぶ幼児の様に言った。
結衣はひたすら涙を流して耐えた。耐え続けた。

ブラックスワン

1

八幡は、結衣のいない雪乃と二人っきりの奉仕部の部室で一人、何も手を付けずに考えていた。

『前評判程下衆な人間ではないですが、

物事に対する姿勢が気に食わない。

ちょっとばっかし昔の自分に似てる気がするせいだと思います。』

(何が、似てるだよ…あんなおっかないスタンドを使いこなせるお前が!

強いお前のどこが俺に似てるってんだ!)

あの顔を思い出すだけでこの前やられて傷がうずく。

自分は正しいはずだ。あの時の選択だって、まちがってない。

あれが誰も傷つかない選択で間違いない。

自分のベストなんだ。

(それは正し!それが『正しいバカ』って言うんなら!

俺はそれで構わない…なのに、なのにっ!)

なんなんだこの言いようのない敗北感は。

まるで負け惜しみを言い続けているような感覚は何なんだ?

「……『ブラックスワン』」

八幡は、昨日ぶりに自分のスタンドを出した。

不気味なこいつが嫌いだった。

顔も見たくない。だからこいつはペストマスクをかぶってるのだろうか?

「虚空を見つめてどうしたの?

見えるはずの無い物でも……見えてるんだったわね。

あなたと、由比ヶ浜さんにギルガ君は…。」

八幡は応えずに『ブラックスワン』の顔に手をやった。

しかしその手は『ブラックスワン』をすり抜ける。

マスクを取ることは出来なかった。

「何してるの?」

「……俺の『ブラックスワン』は、ペストマスク被ってんだ。
だから顔が見えなくてな。もしかしたら、こいつの目も腐ってんのかな、って。」
そう言った時、連絡先などほとんど入ってない八幡の携帯電話が鳴る。
非通知だったが、なんとなく出た。
「もしもし？」
『ヒキガヤか!?僕だ、ギルガだ！
少々説明が難しいんだが、君は妹がスタンド使いだって知ってたか!?』
「はぁ!?オイちょっと待って初耳だぞ！
なんでお前は知ってるんだ!?」
『悪いがその説明後でいいか？
今、彼女はユイガハマのスタンドが僕の「パープル・ヘイズ・ディストーション」のように本体にも害を及ぼすものと知って止めに向かってる！
君も来てくれ！僕と彼女のスタンドじゃ最悪ユイガハマを殺しかねない！』
この時、比企谷八幡の思考は三つあった。
１つ、正直このナランチャ・ギルガに関わりたくないといういつもの彼らしい感想。
２つはもし本当なら小町を人殺しにするわけにはいかないという兄妹としての心配。
最後の３つ目は、結衣に死んでほしくない。
八幡は部室を荷物一つ持たずに飛び出した。
小町は結衣の家を知ってる。なら、そこに行くしかない。
後ろで雪ノ下が何か言っていたが、気にしている余裕はなかった。
何時も通りだ。
なんとかできるのが自分だけだから何とかする。
例えそれが、自分が忌み嫌う『ブラックスワン』を使うとしても。
いつも通り。いつも通りだ。

そう自分に言い聞かせる八幡。
だが、心のどこかでナランチャへの信頼は無いにせよ、
小町と結衣。どちらが重いかと問われて即答できなくなっている
ことに気づいていない八幡だった。

2

フーゴが由比ヶ浜家に着いた時、もう既にことは起こってしまって
いた。
両親は外出しているのかおらず、
リビング中央でスタンドに支えられて立つ結衣と、スタンドを出し
た小町が対峙している。
『ああ?・何?・アンタも来たのぉ?・』
結衣に憑いた影、『ディアー・ドッペルゲンガー』がバカにするよう
な口調で言った。
改めてみる奴はスペックはともかく見た目は紙の様に薄っぺらく、
凹凸もない操り人形と紙人形の背中のような姿だ。
体を動かすたびに『サーッ!』と、
ノイズ音が聞こえ、体に走る砂嵐の形が変わる。
フーゴは虚ろな目で明後日の方を見る結衣と、
そのスタンドを交互に見て静かに言う。
「来るだけね。お前をどうしようもない事は知っている。
ユイガハマのスタンドであるお前を下手に攻撃しようものなら、
本体にフィードバックするダメージでユイガハマを殺しかねない。
『見境なしの皆殺し』を本懐とする僕の『パープル・ヘイズ・ディスト
ーション』に出来ることは何もない。」
『随分理解が早いわね?
同じタイプのスタンドにでもあったことあるの?・』
「人から聞いただけだよ。
お前みたいな本体を食い物にする根性まで薄汚れた寄生虫の存在
をッ!」
それを聞いた『ディアー・ドッペルゲンガー』は顔のあたりのノイ

ズが激しく乱れる。
どうやら、表情筋はないが、挑発に憤る程度の感情はあるようだ。
こんな形でも顔に出やすいのは結衣らしい。
『そんなギルガ君にプレゼントでもしようかな！』
そう言うと『ディアードッペルゲンガー』は結衣の服のポケットから無数のカッターの刃を取り出す。
「まさか！ヒキガヤコマチ迎え撃て！」
フーゴが叫ぶのと無数のカッターが投擲されるのは同時だった。
小町は自身のスタンドの翼を羽ばたかせ、飛ばした羽を起爆させる。
それで作った煙に隠れて二人はソファーの陰に隠れた。
「どうするんですかアレ!?」
「さっきも言ったが僕らにはどうしようもない。
だが二個朝報がある。」
「朝報？」
「おそらく影に一体化しているお陰か奴は本体であるユイガハマから離れられない。
二つ。態々投擲武器を用意していたってことは特殊能力は飛び道具じゃない。
逃げるだけなら君の能力で十分だ。」
「結衣さんをおいて逃げろっていうの!?」
「論外だ。恐らくユイガハマに自殺を促す。
あの手のスタンドは死んだという怨念で無限に動き続ける。
そうなったらだれにも止められない。
僕らの出来るベストは本体が死んで独立した瞬間に真の能力を使わせる前に殺す。
僕の『パープル・ヘイズ・ディストーション』はスタンドみたいな生物由来の精神エネルギーも食い尽くせるから脱皮したての蟹を素手で潰すみたいに独立直後なら倒せる。」
「それ絶対に結衣さん死んじゃうじゃん！」
「ああ。だからやりたくはない。だが…

どんな手段を取るにせよ、
あの影がユイガハマに密接につながってる以上、
彼女が傷つくのは必然だ。
ユイガハマの命を助けるには、彼女を傷付けるほかない！」
フーゴは断言した。
スタンドバトルとはむき出しの己同士の戦いだと。
痛みなくして、勝利はないと！
そしてその痛みとは…由比ヶ浜結衣の精神に訴えかける苦痛であると！
「さあどうするヒキガヤハチマン！
お得意の泥被りは出来ないぞ！
お前が大好きな自己犠牲は出来ないぞ！
お前が彼女を助けたいなら！お前は彼女に向き合うほかないぞ！
さあ！どうする！」
フーゴは玄関の方にわざとらしいまでの大声で言った。
苦しげに顔をゆがめながら、八幡は出て来た。
背後には、ブラックスワンが、拳を握りファイティングスタイルを取っている。
「……。」
『ふふっ！ヒッキーやっはろー！』
「スタンドまでその珍妙な挨拶なのかよ…」
憎々しげに呟く八幡。
そんな彼にまーねー。と、『ディアー・ドッペルゲンガー』は朗らかに返した。
「由比ヶ浜のスタンド。
お前にたった1つ。たった1つだけ質問がある。」
『なあに？』
「お前の能力はなんだ？」
『私は、ヒッキーやゆきのんみたいになりたいって気持ちから生まれたスタンド。
だから能力もそれを実現させるためだけの力…抜け殻になった身

体に入り定着する！
それだけだよ！
正確には本体が死ぬ瞬間の絶望感をスタンドエネルギーに変換して、それを使って私自身を乗っ取る体に合わせた形に変形させる！』
「なるほど。それでお前は初めて真の意味でドッペルゲンガーになる訳か。」
『そう！今度の結衣は優しいよ？
ヒッキーの気持ちも考えるし汲み取るよ？
一緒に、素敵な時間を過ごそう？』
その誘いの答えがわりに八幡は飛び出した。
彼女の豊満な乳房の真ん中に『ブラックスワン』の腕を突っ込む！
『これは、心臓を止めてる!?』
「ひ、ヒッ…きー？」
「由比ヶ浜、、死んでくれ。」
「キ、貴様ァアアア！
本当にっ！本当に堕ちるところまで堕ちたかあーーー！
そこまでお前はっ！
恥知らずになったかぁああ！」
本気で激昂する小町。
フーゴは彼女を押し除け前に出る。
だが遅い間に合わない。
「ヒッキー……。」
そう言って結衣は意識を手放した。
彼女の身体から魂が抜け、天に登り出すのと、『ディアー・ドッペルゲンガー』が彼女の影から離れるのはほぼ同時。
八幡とフーゴは、互いに背中を合わせるように陣取り、
「蘇らせろ！『ブラックスワン』！」
八幡は止めていた心臓を揉み血流を再開させ、
「くらわせろ！『パープル・ヘイズ・ディストーション』ッ！」
『うばっしゃあああああああ！』
『ＵＲＥＥＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ　ＹＹＹ！』

「ガッッッ！はぁーっ！はぁーっ！」
結衣が息を吹き返す。
『ディアー・ドッペルゲンガー』はなんとかして彼女に戻ればまだ助かる！
形を失った彼女はなんとか手を伸ばす。
「無駄だよ。
もうお前は詰んでいる。」
怒涛のラッシュを叩き込む。
スタンドの主、フーゴが静かに言う。
まるでもう決着はついたと言わんばかりに。
「見てみろ。僕の『パープル・ヘイズ・ディストーション』の拳を！」
その拳には1つ、欠けている物があった。
左の親指側の端のカプセルが破けている。
『ばっしゃあああああ！』
それに気付いた瞬間、『ディアー・ドッペルゲンガー』は渾身の左ストレートで吹っ飛ばされた。
同時に体が崩れだす。
獰猛。それは爆発するかのように増え、消える時は嵐の様に立ち去る。
例外は『パープル・ヘイズ・ディストーション』本体のみ。
見えない破壊の嵐は最も簡単に無敵と思われたスタンドを倒してしまった。
「や、やった！」
「行こう。後は2人の問題だ。」
未だ意識を失い眠る結衣を抱きとめた八幡を置いて2人は由比ヶ浜家を後にした。
『ディアー・ドッペルゲンガー』　消滅

Billie Jean

1

「惚気かい？」
「違う！お前のせいで話がややこしくなったって話だよ！
…お前が部室でスタンド出すなんてしたから…。」
結衣のスタンドの件から一夜明けた今日。
フーゴは放課後に偶々合流した八幡とドーナツチェーン店でダベって…いや、ダベってはいない。
八幡の愚痴をフーゴが一方的に聞いていた。
そんな八幡は腐った眼こそ幾分かマシだが、
いつも以上に疲れ顔で、頬は赤くはれている。
何故か。それは時間を昨日の決着までさかのぼる…。

2

フーゴが気を利かせて小町と共にクールに去った後。
結衣はほどなくして目を覚ました。
「私…何が？」
「……お前の心臓を一回止めて、
お前のスタンドがお前のじゃなくなった瞬間に蘇生させた。
スタンドはギルガが倒した。例ならあいつに言え。」
何時も通りひねくれた調子で八幡は答えた。
結衣の表情を見ると、それを聞いてかなり不機嫌そうだ。
無理もない。必要だったとはいえ、自分は一度結衣をこの手で殺したのだ。
スタンドの腕に感じた彼女の脈打つ硬い筋肉の感触は生々しく手に残っている。
「ヒッキー。ありがとう。」
「……は？」
「それってギルガ君の方がスタンド強いからそうなっただけだよね？
ヒッキーはさ。私の心臓、止めたかった？」

「必要ならやるべきだと…」
「質問の答えになってないよ！
はぐらかさないで！質問を質問で返すみたいなことしないで！
……人の気持ち、本当に分からないんだね？」
「…黙れ」
「私、ヒッキーに傷ついてほしくないの。もうこれ以上。」
「黙れ黙れ！」
「最後に頼りすぎちゃった結果が有れだとしたら謝る。」
「黙れ黙れ黙れ!!!
修学旅行の時あれしかないかああしただけだ！
俺しか出来ないなら俺だけが判断材料だ！
俺一人でどうにかできるなら！」
「ヒッキー、言いたくないけど、今回は偶々うまくいっただけだよ。
あんな都合よくギルガ君みたいにヒッキーが出来ないことが出来る人がそばにいることはないよ。」
そう言う由比ヶ浜の口調は、駄々っ子をあやす母親のようだった。
「いつだって、ヒッキーは臆病なんだよ。
ぼっちの仮面付けて無理やり付けた鎧で身を守ってさ。
スタンドのまんまじゃん。」
八幡は『ブラックスワン』を出した。
生身に無理やり張り付けたような鎧に、ペストマスク。
どこか猫背なそいつは、寂しそうな姿に見えた。
「ヒッキー、私、スタンドなくなっちゃったけど見えるの。
ヒッキーの心、しっかり見える。」
結衣は『ブラックスワン』を優しく抱きしめた。
こちらから触る意思が無ければ物体がすり抜けるはずのスタンドが結衣を受け止める。
「な!?お、おい『ブラックスワン』！」
『ブラックスワン』はその両手で結衣を抱きしめた。
「『ブラックスワン』は正直だね。いいこいいこ♪」
『ブラックスワン』は照れくさそうに結衣から離れ、八幡の中に戻っ

た。
いたずらが成功した子供のような笑顔で振り返る結衣に八幡はバツが悪そうに頭をかく。
「頼りなくても頼ってよ。何もできないかもだけど、
ヒッキーがどっか行きそうになったら、絶対止める。」
「どうやってだよ？」
八幡がちょっと意地悪く言うと、
結衣は一瞬八幡の後ろを見た後、
「……鷲掴みにした責任取ってよ……」
と、胸に手を当てて処女とは思えない色気でそう言って見せた。
あっけにとられる八幡に急に背後から、両肩に手を置くものがいる。
「久しぶりねヒッキー君♪」
「ま、ママさん…お久しぶりです…」
「晩御飯、食べていくわよね？」
「い、いや「食べていくわよね？」はい……。」
その日は、夕食と言う名の尋問会となった。
憔悴したまま八幡は帰った後も小町に尋問され、
久しぶりにスタンドエネルギーを酷使した代償か、
大寝坊をかまし、案の定平塚の授業をさぼる形になり、
激憤のシェルブリットを喰らう羽目になったのだった。
そして話は、冒頭に戻る。

3

「てっきりそのまま熱い夜でも過ごして帰ってくると思ったけど、
君はユキノシタの方が好みなのかい？」
「そうゆう話をしてるんじゃない！
いい加減教えろ。
どこで俺の『ブラックスワン』の事を知った？」
やや八つ当たりに近い感情だが、
八幡から見ればフーゴが面倒ごとを運んできたように見えるのだ。

事実、彼が介入しなければ結衣や小町のスタンドのことなど、多分この先知ることはなかっただろうから、間違いではないだろう。
だからこそ、そうなった理由が知りたかった。
「……君は、家族に絆を感じたことはあるかい？」
「は？」
「僕が君の所に来た理由…。
それを知ったらきっと依然と同じようには家族と接せなくなる。
それでも、知りたいかい？僕が、君の能力を知っていた理由を。」
フーゴは八幡の腐った眼を見ていった。
八幡は思わず気圧される。
それは間違いなくフーゴのギャングとしての顔だった。
彼がジョジョと敬愛する上司、ジョルノ・ジョバーナの代理人としての顔だった。
「おや、珍しい顔だ」
そんな顔を全く見ずに話しかけてきたのは勇者、否、魔王だった。
カウンター席にフーゴ、八幡の順で座っていたところを、八幡の横に座ってくる。
「……あ、どうも」
「ヒキガヤ、この人は？
よく見るとユキノシタに似てないこともないが…」
フーゴは不思議そうに魔王…雪ノ下陽乃を見た。
陽乃もフーゴを一瞥し、
「もしかして、比企谷君のお友達？
同じ奉仕部だったりするの？」
「二年J組のナランチャ・ギルガです。
仕事の都合でイタリアからこっちに来てて、
学校や日本の分からないことに関してはヒキガヤ達奉仕部の世話になってます。」
フーゴはあたりさわりのない嘘を吐いた。
ガッツリ奉仕部に関わってるのは事実だが、教える教わるの位置が真逆だ。

「じゃあ雪乃ちゃんのクラスメイトか。」
「あまり関わりありませんけどね。
彼女、僕を警戒してるみたいですし。」
へー。と、猫のような目をしながら陽乃はフーゴをつま先から頭のてっぺんまで値踏みするように見た。
フーゴのこめかみが一瞬ピクリと動く。
「外側から見た奉仕部ってどんな感じ？
他の部活とかに比べてどう？」
フーゴは一瞬八幡の方を見てからもう一度陽乃を見る。
そして机に置いてあったコーヒーで少し喉を湿らせると
「めんどくさい奴らの集まりですよ。
もう狙ってるとしか思えないほどに。
いえ、事実狙ってるんでしょうね。」
「狙ってる？誰が？」
「例えば顧問のヒラツカのお気に入りのあなたとか。」
フーゴは一瞬陽乃の目が丸くなったのを見逃さなかった。
「聞けば色々わざとらしいちょっかい出してるそうじゃあないですか。
妹さんに嫉妬してるのか、
それとも虐めたいから虐めてるのかどうか知りませんけど、
ハラハラドキドキの人間模様が見たいならアニメでもいいんじゃないですか？
北斗の拳とか面白いですよ？」
八幡は心底驚いた。
雪ノ下陽乃を見下す人間がいるなど、考えてもみなかったのだ。
「随分知った風な口を…」
「知ってますよ。優秀な仲間がいましてね。
彼は必要な情報をそろえてくれる。
だからなんとなく見えてたんですよ。
誰か後ろにいるなって。
じゃなきゃおかしいでしょ？

同好会スタートじゃないたった三人の部活とか。
しかも顧問は生活指導も担当って…
ようは問題児を体良く利用しながら構成するためのシステムでしょ？
そこにアンタが外部からの刺激として居る。
いや、妹がそうなると知って自分から勝手に絡んで来た。
違いますか？」
「ギルガお前…時々知らないこと知ってるふうに感じたのはそうゆう事かよ。」
「ああ。彼も僕らと同じだよ。」
その言葉に八幡は昨日小町から聞いてかろうじて頭の片隅に残っていたトランプ占いのスタンド使いの事を思い出した。
（こいつ…絶対おかしい。
名にしたか知らないけどあんな一瞬で敵を消し飛ばすような能力をちゃんと調べられる環境にいれるって…下手したら雪ノ下家よりやばい所からの回し者だよな？）
そして思い当たった一つの仮説にうすら寒い物を感じた。
もしかしたらナランチャ・ギルガと言う名前も偽名かもしれない。
その想像が当たってる当たり八幡は運が悪いだか良いんだが…。
「君、なんか詰まんないね。」
陽乃がそう言った瞬間、だった。
フーゴの目つきが明確に変わる。
黒く、熱く、そして甘さなんて全くない怒気だけに染まる。
「あ゛あ゛!?てめぇ今なんつった！
俺のことつまんねえ人間っつったのかぁ!?」
そして怒鳴り声をあげて立ち上がると八幡を押しのけて陽乃の胸倉をつかみ上げた。
「な!?お前急にどうし…」
「つまんねえのはてめえみてぇな年下僻んでイチイチ温い真似して場を面白おかしくしてくれる薄ぺらで下衆なアマの方だろうが！
大体一方的におしかけてきて相席してる分際でえええ！

上座ずかずか上がり込んで踏ん反り返るみたいなまねしといて偉そうに人の価値をはかってるんじゃあねえぞ！
このドぐされがぁあああああああ！」
そう言ってプラスチックのティースプーンを左耳に突っ込んでぐりぐりと最奥まで押し込みかき回し始めた。
「ギルガよせやり過ぎだ！」
「はっ！……す、すいません！
自分でも分からないんタイミングで急に切れてしまうんです！」
フーゴの手を借りてなんとか立ち上がった陽乃は半泣きになりながら店を飛び出して行った。
「あ、あの…お客様？」
話しかけて来た店員にフーゴは財布からぱっと見１０万はある札束を取り出し手渡す。
「迷惑料と僕と彼の分の会計だ。
釣りはいらないよ。あと、これは口止め料。」
と、言って最後に店員の胸ポケットにＱＵＯカードを差し込むと去って行った。
「…すいません。残ったドーナツ持って帰るんで紙袋貰えませんか？」
八幡もさっさと帰ることにした。

４

同じころ、どこかのエレベーターにて。
きっちりと機械的なまでに３列に３人づつ人が並んでいる。
そこに雪ノ下雪乃の姿もあった。
「うっ！」
何かが刺さるような音と共に
一人、また一人と、バタリ、バタリと、倒れていく。
そして最後に雪乃にも、床から飛び出した何かが刺さる。
「あ……」
ズルり、と、彼女の背後からガラス片で作った人型のような物が現

れる。
　その瞬間、エレベーターのドアが開き、彼女は外に出た。
「なるほど。この日本の杜王町にいた『スーパーフライ』と同じタイプのスタンドか。
　最後の六本目がここに、六本の矢の半分がこの島国にあったことは驚きだな。」
　雪乃が振り返るとそこにボルサリーノ帽をかぶった伊達男がいた。
「任務上、本名は名乗れなくてでね。
　便宜上、レオーネ・アバッキオとでも呼んでもらおうか。」
　そう言ってムーロロは指を鳴らして自身のスタンド、『オール・アローング・ウォッチタワー』を集合させる。
「……」
　雪乃は無感動にスタンドを繰り出した。
　ムーロロも特に感情もなく雪乃に対峙する。
　八幡にとって最後の壁が、フーゴにとって日本で最後の任務が近付こうとしていた。

ダイヤモンドの純度

1

六本目のスタンドの矢の奪取、又は破壊。
それがムーロロに与えられた真の任務だった。
何故今後組織に絶対に必要になる矢を彼が取りに来たかと言えば、ジョルノ・ジョバーナがジョナサン・ジョースターやディオ・ブランドーの血を引くからに他ならない。
かつてアメリカであった空条承太郎とその娘が巻き込まれたあるスタンド使いと矢が起こした事件に手ジョルノと『始まりの同じ二人』の血を引くものが大きくかかわっていた事も有り、今ジョルノは杜王町のスタンド使い達や波紋戦士、スピードワゴン財団などあまりにも多くの連中に要らぬ警戒をされているからだ。
「……『ピュアリティー・オブ・ダイヤモンド』」
雪乃の呼びかけにたった今名付けられた彼女のスタンドが雪乃の肩に触れる。
瞬間、雪乃は地面がえぐれるほどのダッシュでムーロロの懐に飛び込み、
華奢で運動不足の体力なしの彼女には凡そ似つかわしくない打撃を叩きこんだ！
「『ウォッチタワー』！」
ムーロロは何とか♣のKを身代わりに内臓破裂こそ防いだが、
そのまま吹っ飛ばされ、その先にあった郵便受けにに叩きつけられる。
（ミスタ様の『セックス・ピストルズ』やマッシモ・ウォルペの『マニックス・デプレッション』のように物質や本体にスタンドパワーを与えることで初めて能力が発揮されるタイプ！）
なんとか帽子に隠したリボルバーを取り出し全弾放つが、
全て本体の前に出たスタンドヴィジョンに軽々防がれてしまった。
（本体のパワーまであるのか…これは…厄介…）
意識を手放す寸前、ポケットに入れたケータイの着信音が鳴り響

く。
ムーロロは何とか電話に出た。
『もしもしレオーネ？
あなた、いつも僕が学校から帰るのが遅いと苦言を呈する癖にいざ連絡すればこれですか？
家にもいないし車もないし…今どこです？
もしもし？アンタ本当に今どこですか!?
まさか…スタンド攻撃に？レオーネ？レオーネ起きてますか!?
……今のは、エレベーターのドアの音ですね？
意識が有ったら僕のところに一枚寄越してください。
いいですね!?きりますよ？』
通話はそこできれる。
雪乃はそのケータイを拾い上げると、どこかに電話をかけ始めた

2

『ねえ比企谷君…彼、何者なの？』
「ギルガのことですか？何者って…。
ただちょっと切れたら怖いイタリアからの転校生ですよ。
後付け足せば俺にとって貴重な知り合い以上友達未満。」
ドーナツ屋を後にしてすぐ。
八幡のケータイに陽乃から電話がかかって来た。
電話越しの声はひどく怯えていて、
何時もの彼女とは１５０度ぐらい印象が異なる。
『嘘つかないで！あいつ…私の事っ！
……殺すとか殺さないとかそんなことちっとも考えてなかったッ！
ただどこまでも攻撃することしか！
死ぬとか死なないとか！全く考えてなかったじゃあないの！』
つまり彼女は仮に相手が死んでも怒り続く限り暴行をやめなかったと言いたいんだろうか？
スタンドは使用者の内面を表す。

フーゴのスタンド、『パープル・ヘイズ・ディストーション』。
直訳で歪みの紫煙。凶悪かつ攻撃的なスタンド。
結衣が自分の内面をスタンドから占ったように彼を分析するなら、
内側に押し込めた凶暴性がある時噴き出る。
そうゆう事だろうか？
「まあ、だったら雪ノ下さんが不必要に絡んでこない方がいいってだけの話じゃあないですか？
触るな危険は触らなきゃいいし、ライターは上手に使えば火傷しませんよ。」
『それは…そうだけど……』
「あいつ、アンタの事、精々迷惑かけた相手程度にしか思ってないですよ？
それに雪ノ下家のこと、知ってても知らなくても、
あいつならどうにかしちゃいますよ？多分。」
『ほんとうに何者なの？』
「……見えないんなら、
見なくていいんじゃないですか？」
いつも変ななぞかけや宿題ばかり出される意趣返しにちょっと意地悪く言って八幡は電話を切った。
もしスタンドの事を素直に言えば『増長』とか言われそうだが、ちょっと自信がついただけだ。
自分を、見てくれる人もいるんじゃあないか？、と。
「あれ？小町今から出かけるのか？」
「お兄ちゃん！なんか雪乃さんから来てほしいって。」
「そっか。あんまり遅くなんなよ？」
「わかってるよ！」
そう言って小町は入れ替わりで家から出ていった。
八幡は手洗いうがいを済ませると、早速持ち帰ったドーナツを頬張る。
（にしても小町を雪ノ下が？珍しい事も有るな。）
久しぶりにテレビをつけてニュースなど眺めてみる。

『えー、速報です。
今日未明、千葉県千葉市の〇〇マンション前で発見された死体の身元が判明しました。
発見されたのは市内に住む建設会社専務の「元町智樹」さん。３９歳…』
（おいおいこのマンションモザイク掛かってるけど雪ノ下のマンションじゃあねえか！
それに建設会社って…）
八幡はすぐさまスマートフォンで雪ノ下建設について検索した。
（さすがネット民。もう調べ上げられてる…。
雪ノ下建設のライバル会社所属で、どうにも年下趣味あり…まさか…）
嫌なものを感じる。
八幡はドーナツを齧りながら家を飛び出した。

３

「あ。雪乃さん！お久しぶりです！」
指定された彼女のマンションの前。
小町は制服姿のまま待っていた雪乃を見つけた。
「来てくれたのね。うれしいわ。」
雪乃は柔らかな笑みを浮かべて小町を迎えた。
そしてその手を取り自分の部屋の方に招く。
そしてエレベーターホールまで来た時、その以上は分かった。
「え？こ、これ…」
人間が倒れているのだ。
一人二人じゃない。ざっと十人。
「は、早く助けないと！」
「必要ないわ死んでるもの。」
どうゆう事ですか？と、聞こうとするより、強烈な左ストレートが小町の頬を打った。
「うぼぉおおお！」

小町はきりもみ回転しながらその死体の上に転がされた。
見ると次撃でかかと落しを食らわせようとしてきている。
「『ドリーム・バイ・エンジェル』ッ！」
小町は持ち前のスピードでどうにか回避し、
立ち上がるが、雪乃の怒涛の連撃は終わらない。
生身にも関わらす殴った壁はへこみ、地面には亀裂が入る！
（お、おかしい！こんなの絶対おかしいっ！
どう考えたってスタンドの形も雪乃さん自身も貧弱なのにこんなパワーが!?
なにか、何かからくりがあるはず！）
小町は自身のスタンドを前に出し、その羽を羽ばたかせる。
爆発性のある羽の遠隔起爆。
スタンドそのもの攻撃力を削っている分、その威力は発動さえすればダメージを狙える。
「ちょっと痛いですよ！」
「無駄よ。射程距離3メートル。
そこにいる限り勝ち目はない！」
雪乃は冷徹にい放つ。
そして羽を一切無視して小町に接近。
小町は羽を起爆させ、バランスを崩させようとする。
だが！人を吹き飛ばせるだけの威力を誇るはずの羽の爆発、そよ風程度しか起きなかったのだ！
「え!?な、なんで!?うべばぁあああ！」
『バルバルバルバルバルバルバル…ッ！』
懐に潜り込んで来た『ピュアリティー・オブ・ダイヤモンド』にラッシュを叩きこまれ飛ばされた。
「やっぱり三つ以上やると威力が落ちるわね。」
そう感動なくつぶやくと雪乃は小町を引きずって『矢のエレベーター』に彼女を放り込む。
「待ってるわよ。比企谷君、ギルガ君…。」

死刑台のエレベーター

1

「あれ？おーいヒッキー！どこいくのー!?」
優美子たちと別れ帰路についていた結衣は慌てた様子で走る八幡を見つけた。
自分の呼びかけにさえ気付かないほど焦り走り続ける。
方向は、間違いなく雪乃のマンションの方だ。
（もしかして、また、誰かのスタンドが？）
結衣は八幡を追いかけた。あまり運動は得意でないが、
もし八幡が危険に飛び込もうとしているのなら、
もし雪乃が今危険な目に合っているなら、放っておかない訳にはいかない。
（やっぱりゆきのんのマンションの方！
それにあそこにいるのって…）
結衣は道路の反対側に同じ方を目指すフーゴがいるのを見た。
彼が出張っているってことは、もう確信していいだろう。
新手のスタンド使いの存在を。
「ヒキガヤ！それにユイガハマも！」
「ギルガ！お前も来たってことは…」
「ああ。仲間と連絡が途絶えた。彼を最後にね。」
そう言ってフーゴはポケットから手足の生えたトランプカード、♦のJを見せた。
「え？もしかしてこれも…」
「スタンドだ。53枚で一つの群生タイプ。
本体にかろうじてでも意識と体力があればこうしてメッセンジャーを飛ばせる。」
「なるほど…。」
三人はマンションを見上げる。見慣れたはずのその建物は、
今は何者が潜んでいるか分からない不気味さを持っている。
少なくとも『ゴゴゴゴゴゴゴ……』と、効果音が聞こえてきそうな

くらいには。
「仕方ねえ。行くか。」
「ユイガハマ。君は下がっているんだ。
スタンドは見えるのか知らないが、
それに対して攻撃も防御も出来ない君が来るべきじゃない。」
「ううん。私も行く。
そのトランプの人やゆきのん担いで逃げるぐらいは出来るよ。」
「……。」
「あきらめろ。意外と頑固だぞ。そいつ。」
「君が言うんならそうなんだろうな。」
フーゴは二人を交互に見て笑いながら言った。
「なんだその言い方…何いてえのかさっぱりだ。
ほら！由比ヶ浜！もじもじしてねえでさっさと行くぞ！」
三人はマンションに突入した。
「あれは…小町！」
すぐに玄関が向こうから開き、
ふらふらとした足取りで小町がスタンドに支えられながら出て来た。
「待てヒキガヤ！様子がおかしい！」
「ケガしてんだから当たり前だろ！小町！」
迷わず駆け出す八幡。
彼は小町しか見ていなかった。
だからこそ、彼女の背後の『ドリーム・バイ・エンジェル』が羽を掴んだ右手を振り下ろそうとしているのが見えなかった！
「まずい！『パープル・ヘイズ・ディストーション』！」
射程距離五メートル。
それは幸いにもフーゴから小町までの距離だった。
羽を掴んでいた右手を捻り上げ、足払いで転ばす。
小町はスタンド共々盛大にスッ転びズデェエエエエン！と、後頭部を殴打する！
「おい何やってんだお前！」

「君こそ！彼女が攻撃しようとしてたのが見えなかったのか!?」
「攻撃だって!?」
「ああ。恐らく敵のスタンド能力は洗脳だ。
本体の支配欲が強いのか、それとも何かに固執するゆえに発現した能力なのか…
それは分からないが、とにかく今回の敵は相当強力という事だ。
狡猾だったユイガハマのスタンドとは別物だ。」
「……わかった。由比ヶ浜。小町を頼めるか？」
「うん。絶対、絶対ゆきのんと無事に帰ってきてよね！」
2人はエレベーターホールに突入した。
「待ってたわ二人とも。
あなたたちもすぐに倒してあげる。」
そう言ってスタンドを出現させる雪乃。
「!?　あいつ…いつスタンドを？」
「恐らく『矢』だ。ある特殊な矢に射られ適合したものはスタンド使いになる。
彼女はその狭き門をくぐりスタンド使いになったんだ。」
「マジかよ…小町を洗脳した野郎はそんなモンまで持ってるのか!?」
「ここは任せる。僕は矢を取ってくる！」
「ああ！頼んだ！」
フーゴを見逃した雪乃は一歩前に出て、不敵な笑みを浮かべる。
八幡もスタンドを出した。
「案外、初めてかもな。
お前と真正面から明確に『戦う』のは。」
「結果は見えてる。
時間を節約させてくれるかしら？」
フーゴが乗ったエレベーターが動き出す。
それと同時に二人は走り出した。

2

エレベーターに入ったフーゴは最上階から調べようとボタンを見

る。
「なっ！なにぃぃぃ!?」
慌ててドアの外に出ようとしたが、不可能だった。
瞬間ドアが閉まり、押してもないのに『２００階』のボタンが光る。
「こんな東の外れの国の地方都市の！
高級マンションとは言えただのマンションに２００階なんてあるわけが無い！
エンパイア・ステート・ビルの倍なんてありえない！
なんてことだ…こいつが！［［ｒｂ：エレベーターがスタンド　＞・・・・・・・・・・・］］だ！
それもあまりに持つエネルギーが巨大すぎて本体にも制御できず独り歩きしている！
無意識に人を誘い込み思い通りになる形と、それを実行できるだけの力を与えて解き放つ！
本体が何も労せず町の支配者になる為のスタンド！
なんて質の悪いっ！下手にのさばらせれば本体の死後っ！
意思なきこいつが街の王だ！」
こうしてはいられない。
強烈なＧでぺちゃんこにされる前に脱出しなければ！
「『パープル・ヘイズ・ディストーション』ッ！床を壊せ！」
『うばっしゃあああああああ！』
なんとか床に人一人くぐれるだけの穴をあけ、
ワイヤーに捕まりながら降りる。
「うっ！」
エレベーターの底にはつぶれた人間が溜まっていた。
恐らく脱出を試みたか。あるいはこのスタンドに食われた人間の成れの果てだ。
「なんてこった。昇降機が２００階から降りてきた瞬間僕の負けが決まる！
いくら『パープル・ヘイズ・ディストーション』のパワーでも受けきれないし、下手受ければ拳のカプセルが！」

絶体絶命。
フーゴは恐らく手は空いてるであろう結衣に電話をかけた。
『もしもしギルガ君!?』
「ユイガハマ！今ヒキガヤとユキノシタは？
今まさに絶体絶命だ。正直今すぐ助けが欲しい！」
『え、えっとヒッキーも大ピンチで！
ゆきのん滅茶苦茶強いの！なんか、そんなに体力なかったはずなのに生身でヒッキーのことボコボコにしてるし！』
「生身のままだって？」
フーゴはかつての級友にして運命により引き合った宿敵でもあったマッシモ・ウォルペを思い出した。
彼も自分のスタンドパワーを自分に注入し、自信を強化して戦うタイプのスタンド使いだった。
「ユイガハマよく聴け！
本来スタンドは能力にパワーを割くとスタンド像のほうは弱くなるのが基本ルールだ。
ユキノシタのはどうだ？」
『え？ゆきのんスタンドでもヒッキーと「ブラックスワン」を攻撃してるけど、どっちも強いよ？』
「多分それが敵能力のヒントだ。
本当はヒキガヤコマチからも話を聞きたかったが、
何か弱点があるはずだ。観察して何としても助けるんだ！
本来有り得ないその現象に、何かヒントがある！」
『そんなこと言ったてそんな本当とは違う逆ってことでしょ!?
何かズルでもしてるって話？』
「そのズルの正体が能力だってんだろうが理解しろ！
股も頭もガバい淫売がぁあああーー！
誘ってる様にしか見えねえスカート履きやがって！」
『誰がヤリマンだし！私処女だし！
大体そんなこと言われたってスタンドのこととか全然知らないから逆とか言われても……逆…そうだ逆だ！

何時ものゆきのんと逆なんだ！』
「？……性質を逆転させる能力！そう言いたいのか⁉」
『きっとそうだよ！
相手を弱くしたり強くしたりする能力ならヒッキーを弱くして
やっつければいいんだもん！
それをしないってことはそうゆう事だよ！』
「そうか…。ユキノシタを倒して加勢に来てくれ！頼んだ！」
電話を切り、迫りくる昇降機を見上げながらフーゴは拳を握り、
『パープル・ヘイズ・ディストーション』を出現させた。
「行くぞ相棒。覚悟はいいか？僕は出来てる。」
［ｎｅｗｐａｇｅ］
「無様ね比企谷君！まるでボロ雑巾じゃあないの！
早く楽になった方がいいわよ！
『ピュアリティー・オブ・ダイヤモンド』ッ！」
『バルバルバルバルバルバルバル！』
「御免だなぁ！『ブラックスワン』！」
『UREEEYYYYYYYYYYYYY!!
DOROROROOOOOOOOOOO!!』
渾身のパワーでなんとか『ピュアリティー・オブ・ダイヤモンド』を
押し返そうとする『ブラックスワン』だが、パワーでもスピードでも
圧倒的に勝る相手に逆に拳を割られ吹っ飛ばされる。
「ヒッキー！」
「く、くっそ！」
『ギャ、ギャレ……ッ！』
もう八幡の意識もスタンドパワーもぎりぎりだった。
なんとか壁に背を預けながら立ち上がり、雪乃を睨む。
「ヒッキー！ゆきのんのスタンドは逆にするスタンドだよ！
例えば筋力とか足の速さとか！」
それ聞いて何になるんだよ。
それ実質精々並みしかスペックない自分に太刀打ちできないって
ことじゃあないか。

と、八幡は思った。
「あら由比ヶ浜さんにしては慧眼…いえ、ギルガ君の入れ知恵ね。
人から聞いただけなのに私のスタンド能力を看破するなんて流石はＩＱ１５２と言ったところかしら？」
自分の手の内をバラされたのに雪乃は寧ろ自分の能力を自慢する様に堂々している。
（能力、か。）
スタンドは１人につき１つ。
能力も精神的成長により『能力の切り替え』が可能になるａｃｔ系の進化などの例外を除き変わらぬ原則。
当然、八幡の『ブラックスワン』も、その平々凡々なヴィジョンのスペックを補う様な強力な物を持っている。
（使えるか？今の俺に…）
相手との差は歴然だ。
なら、使うしか無い。
あの日の痛みを、超えるしか無いっ！
「雪ノ下…公平になる話をしよう。
俺のスタンド、『ブラックスワン』はスペック的には中堅程度だ。
ややスピードはあるがパワーは人並み。
まあ各党に向いてるかな？って感じの微妙なスタンドだ。
まあ、今回はそれが吉と出て急に弱くなったりする事は無かったが…」
「それがなんだって言うの？」
「だからこそ俺のスタンドは性根が腐ってるって話さ。
由比ヶ浜の奴の『乗っ取り』やお前の奴の『性質反転』の様に、俺の『ブラックスワン』にも特殊能力がある。
それは、視界に入れた相手に無理やりトラウマを回想させる事！
最も『痛む』その記憶は毒となり！
致命的な隙を、たった一瞬晒させる！」
雪乃は慌てて物影を探したが間に合わなかった！
八幡の司会にとらえられたその瞬間、彼女の脳裏を駆け抜けたの

は、今の性格を決定付けたと言っても過言ではない、小学校時代のいじめの記憶だった。

嫌だ！思い出したく無い！

目を背けたい！

人間なら、誰もが思う弱い部分。

比企谷八幡は！そこに容赦なく抉り込む！

「ぶちかませ！俺のスタンドォオオオオ！」

『UREEEYYYYYYYYYYYYYYYY!!
FUUUSHAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

雪乃と、そのスタンドに全力のラッシュを叩きこむ。

倒れ込んだ雪乃は気絶して動かなくなる。

どうにか勝った八幡の拳からは、

血が吹き出て、力が入らない。

が、止まるわけにはいかない。

「由比ヶ浜！ギルガは!?」

「なんかピンチみたい！でもヒッキーの手…」

「……行くしかねえだろ。」

決着は目前。だが、じん、と残る拳の痛みに八幡は不穏な物を覚えた。

その拳を叩きこむ

1

「来るぞ！『パープル・ヘイズ・ディストーション』ッ！」
『うばっしゃああああああああ！』
　拳のカプセルを外した『パープル・ヘイズ・ディストーション』が飛び出し迫りくる昇降機を何とか打ち返そうとラッシュを叩きこんだ。
　だが凡そ人数人分しか乗せられないはずのそれは異様な重さと勢いで重力以上の理由で接地しようとする。
「まだだ！パワーを振り絞れっ！何としても耐えるんだ！」
『ぼっしゃああああああああああああああああああああ！！！！！！！』
『パープル・ヘイズ・ディストーション』の拳がその勢いを増す。
　巨大な金属の塊を殴る音が吹き抜けに響く！
　規則的な音の中に何かをこじ開ける様な異音が混じって聞こえた。
　フーゴが脱出のためあけた穴からついさっき共にこのマンションに足を踏み入れたアホ毛付きのボサボサ頭が見えた。
「ヒキガヤ！」
「来い！引っ張り上げる！」
　そう言って差し出された拳は切れて血が流れていた。
　フーゴは『パープル・ヘイズ・ディストーション』をすり抜けてその手を掴もうとした。
　しかし！
「あっ！」
　八幡のうなじを、壁から飛び出て来た矢がかすった！
「今のは!?まさか…『矢』か!?」
『矢』によって暴走したスタンドがどうなるか。
　人づてにでも聞いていれば、嫌な想像を、最悪の事態を想定せずにはいられない！
（頼む！頼むぞヒキガヤ！このエレベーターに加え暴走した『ブラッ

クスワン』なんて…）
『ギャァ ァ ァ ァ ァーーーーー レェ エ エ エ エ エ エ エ エ エーーーーーーーーーーー！』
勝手に八幡の背後に現れた『ブラックスワン』もうなじが切れていた。
そこから鮮血が噴き出し鎧を、体を、赤く染め、かきむしるようにペストマスクを引っぺがす！
「な、なんだ…なんだこれは!?」
「スタンドが変わってるんだ！
『スタンドパワー』の『その先』を引き出す！それが『矢』のパワー！
ヒキガヤ！君のスタンドは今！別の物になろうとしている！
絶対に制御するんだ！どんな形でもいい！
そいつが暴走してこのエレベーターと何か噛みあった瞬間！
僕らの負けが決まってしまう！」
吹き出る血、変わるスタンド、異常事態。
正直、八幡は色々いっぱいいっぱいだった。
どんな形でもいいから制御しろと言われても、
今まで嫌っていたこいつが違う形になってくれるなら、
願ってもないが…。
そうやってその場しのぎの『解消』をしてきたからこうして『解決』しか出来ない問題が来てしまったようにも感じる。
命の危機、絶体絶命の窮地にも関わらず、
八幡の思考は痛みと奇妙過ぎる現状のお陰でどこかクリアでよく回った。
「あーもう。ぐちゃぐちゃ考えるのはめんどくせえな。」
「ヒキガヤ?」
「いい加減この糞めんどくせえ事態を収拾つける！
何も考えねえで一回ぐらい言ってやる！てめえらなんか嫌いなんだよ！
ぶん殴るからそこを動くな！
今まで他の言い訳しか使ったことなかったから今！

今だけ最後に使わせてもらう！
お前らのせいでこんなこじれてんだよ！どいつもこいつもすっこんでろ！
俺の前に立つんじゃねえええええええ！
その出来のイマイチな脳みそ！
蟻にトンネルあけられてそこから更に食われて半ば腐った皮だけのジャガイモみてえに中身スカスカにされてぇかぁあああ！」
葉山とか陽乃とか、
あと、少しは感謝してるし尊敬してるが平塚とか、
中学の時の同級生とか、塩対応の親父とか、
今助けようとしてるフーゴとか、
もうとにかくいろんな人間の顔を思い浮かべて八幡は握りしめた拳を床に叩きつけた。
「雪ノ下の件といい！小町の件といい！
テメエのツケ！耳揃えて全額払ってもらうぜ！
『ブラックスワン』！……『ジ・アクシデント』ッ！」
グルん、と、『ブラックスワン』の眼球が裏返り瞳の赤と、地の黒が逆転する。
『ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
ムダムダムダムダムダムダムダムダムダ！』
『ブラックスワン・ジ・アクシデント』の拳がエレベーターの天井を破壊する！
そして吹き抜けに飛び上がると、壁に向かっても拳を振るう！
『ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
！』
壁を蹴りながら一番上まで飛び上がり、天井を蹴ってまた戻る！
『ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ

ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
ムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダムダ
ムダァアアアア！

　UREEEYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY
YYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY
YYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY
YYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY！

ムッっッッッ

ダァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！』

　完全につぶれた昇降機の真上に砂塵と共に八幡は舞い降りた。スタンドのどこかから落ちて来た矢をキャッチする。

「ブラックアウト…てめぇの意識と、未来がな。誰かさん。」

「うっひゃー…ヒッキーすごーい……」

「全く。どんだけため込んでたんだ…。

　僕が脱出してるとかしてないとか考えずにやっただろ…。」

「まあな。けど…」

「けど?」

「ようやくスッキリした!行こうぜ!二人を手当てしねえと。」

　そう言った八幡の顔はぎこちないながらも、さわやかな笑みがあった。

2

　翌日。雪ノ下の引っ越しが決まった。

　流石に死体まで見つかったマンションに娘をずっといさせる親ではないらしく、すぐに戻って来いと言われたらしい。

「正直、あまり気は進まないけど、無様に操られた上に

　誰かさんにまで敗北を喫したんだもの。

　この先どんだけ恥を上塗りしても平気だわ。」

なんてあいつにしては珍しく俺に悔しそうな顔を見せて言った。
そのあと家族と話し合って、珍しく雪ノ下さんを言い負かして泣かせる雪ノ下の姿があったとか。
そして回収された『矢』はと言うと…
「調べたところ、葉山夫妻が新婚旅行先の露店で買ったものだそうだ。
しばらくインテリアにしてたらしいけど、
いつだったか模様替えした時にしまったきりと思ってたらしい。
多分、その時に葉山隼人が触れてスタンド使いになったんだと思う。
現にあの日、彼は急に体中をかきむしったかと思うと白目をむいて口から泡を吐きながら卒倒するようすがショッピングモールの防犯カメラに写ってたし、ほぼ間違いないと思う。」
学校では相応の騒ぎがあったが、意志の無いエレベーターにいつの間にか支配されてるよりかはマシな混乱なんではなかろうか？
その後ギルガは怪我した仲間と共に『矢』を持って帰国。
奉仕部もいくつか依頼をこなしつつ、どうにか平常運航に戻ったと言って良いだろう。
若干雪ノ下の毒舌が減少傾向にはあるが。
さて、そんな俺たち奉仕部が今どこにいるかと言えば…

3

「あれ？奉仕部の三人じゃん。どうしたの？
こんな土曜の昼間に。」
「姉さん。ちょっと引っ込んでてくれるかしら？
今から大事な5人目の部員を迎えなきゃいけないの。」
「五人目？」
「あー。今いろはちゃんってこの前依頼してきた子が入り浸ってて、実質部員、みたいな？かんじなんです。」
ふーん、と、何やら四人目、一色を利用する算段でも考えているのか企んでる笑みを浮かべる。
しかし、その笑みは、次の瞬間、電車から降りて来た改造制服のあ

いつの顔を見て凍り付くことになった。
「やあ皆。久しぶり。」
何かいい事でもあったのか、朗らかな笑みを浮かる彼は、トレードマークの紫のイチゴのピアスを揺らして再びこの千葉に降り立った。
「え、えっと…まさか、五人目って…」
「紹介するわ。ナランチャ・ギルガ君よ。」
「お久しぶりです。ミスユキノシタ。
あの時はひどい無礼を働いてすいません。
これはせめてものお詫びです。白がお好きだと良いんですけど。」
そう言ってグレコ・デ・トゥーフォーの白ワインを受け取った陽乃は半泣きになりながらホームを走り去っていった。
「嫌われちゃったなぁ…」
「ま、気にすんなよ。あの人に明確に怖がられるって、
何気にレアなポジションだぞ?」
「そうね。あなたがいてくれると心強いわ。」
雪乃は姉の後姿を見送りながら闇黒微笑を浮かべた。
「は、ははは…ゆきのんお手柔らかにね〜」
苦笑いを浮かべる結衣。
男性二人も同様だった。
「行こうぜ。昼前だしなんか食おう。」
「いいね。実は目を付けといたリストランテがあるんだ。
ポルチーニ茸をたっぷり乗っけた窯焼きのマルゲリータが食べれる。」
「なにそれすっごくおいしそう!」
「一色も呼ぶか?こいつの歓迎会で。」
「良いでしょう。あとで部費から出しましょう。」
四人は駅を後にする。
スタンド使いとスタンド使いはひかれあう。
きっと彼らに降りかかる苦難はこの先もあるだろうだが、
「所でヒッキー、最近よく左肩揉んでない?
右利きでもこるの?」

「いや、最近変な痣出来てきて…撃ったとかじゃなくてなんっか…入れ墨みたいに奇麗な星形になってきてさ。
温泉はいれるかな…」
きっと大丈夫だろう。
彼にもまた、地上の星、ジョースターの血と、それに見合う意志があるのだから。